

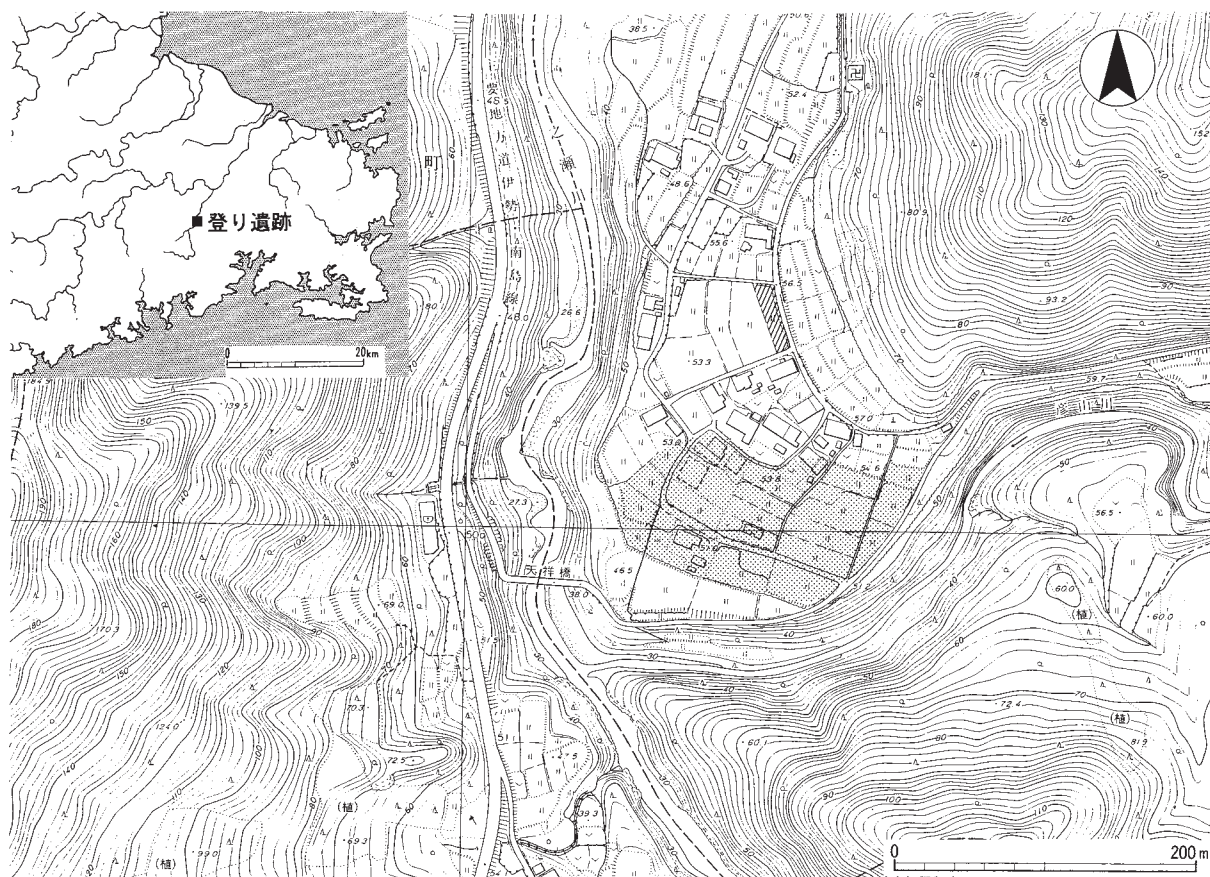
三重県登り遺跡採集の縄文早期遺物について

奥 義 次

1 遺跡の位置および発見の経緯

本遺跡は伊勢南部を貫流する宮川支流の一之瀬川右岸にあり、牛草山（550.3 m）南西から流れてきた彦山川との合流点に向けて張り出す台地の南向き緩斜面に位置する（第1図）標高は約 50 ～ 53 m。行政上は度会郡度会町大字火打石字登りに属する。現況は水田を主とし、一部、宅地・畑・道路となっている。平成8年1～4月、皇學館大学考古学研究会により、一之瀬川流域における遺跡分布調査が行われ、石鏃・剥片などが初めて確認された。一方、この遺跡確認とは別に、以前から計画されていた、当地域の圃場整備事業が同年10月から始まった。そして、工事がほぼ終結した平成8年度末近くになって、縄文早期遺物を中心とする顕著な散布状況が注目されるようになった。それは、このころ成瀬 匡章・奥 義次の両名が押型文土器の確認を契機に、資料の蓄積と詳しい散布実態（包含状況）を掌握するため、再々、表面調査を繰り返したことによる。ここに紹介する資料は、当時、集中的に採集した遺物が主な対象であり、遺跡規模の推定（土器型式別の分布相）や評価については、そのころの踏査メモおよび実地での感触に依拠するところが大きい。

縄文早期遺物散布範囲のやや北側では同年12月、当センターによる発掘調査（第1図・斜線部分の600m²）が実施されている。それだけに、研究サークルなどの自主的な分布調査と開発前の行政的な対応とがうまく合致せず、当該範囲内における本格的な調査が成されないまま、工事の完了したことが、今更ながら悔やまれる。



第1図 登り遺跡位置図（1：5,000）

〔網点は縄文早期遺物散布推定範囲、斜線部分は平成8年度当センター調査区〕

2 一之瀬川流域における旧石器・縄文遺跡の現況

一之瀬川は宮川水系の数ある支流の中で、上流域の大内山川に次ぐ規模（流長、流域面積）を有する。しかし、その割には今まで調査が遅れ、明確な旧石器・縄文遺跡は本流との合流点近くにある下久具・万野遺跡、山崎遺跡などを除くと、全く不明ないし空白地域となっていた。従って、当流域の遺跡分布調査は平成8年の皇學館大學考古学会による調査が最初のことで、これによって石鏃、剥片などの縄文時代と推定される散布地が本遺跡を含めて合計8カ所確認された。このうち現在までに、縄文土器・石器などがまとまって確認されているのは本遺跡のみで、あとはいずれの遺跡も確実な縄文土器そのものが見つかっていない。その意味で今後の調査に待つところが大きく、今回の遺物紹介はさしずめ、その手始めとなるものであろう。

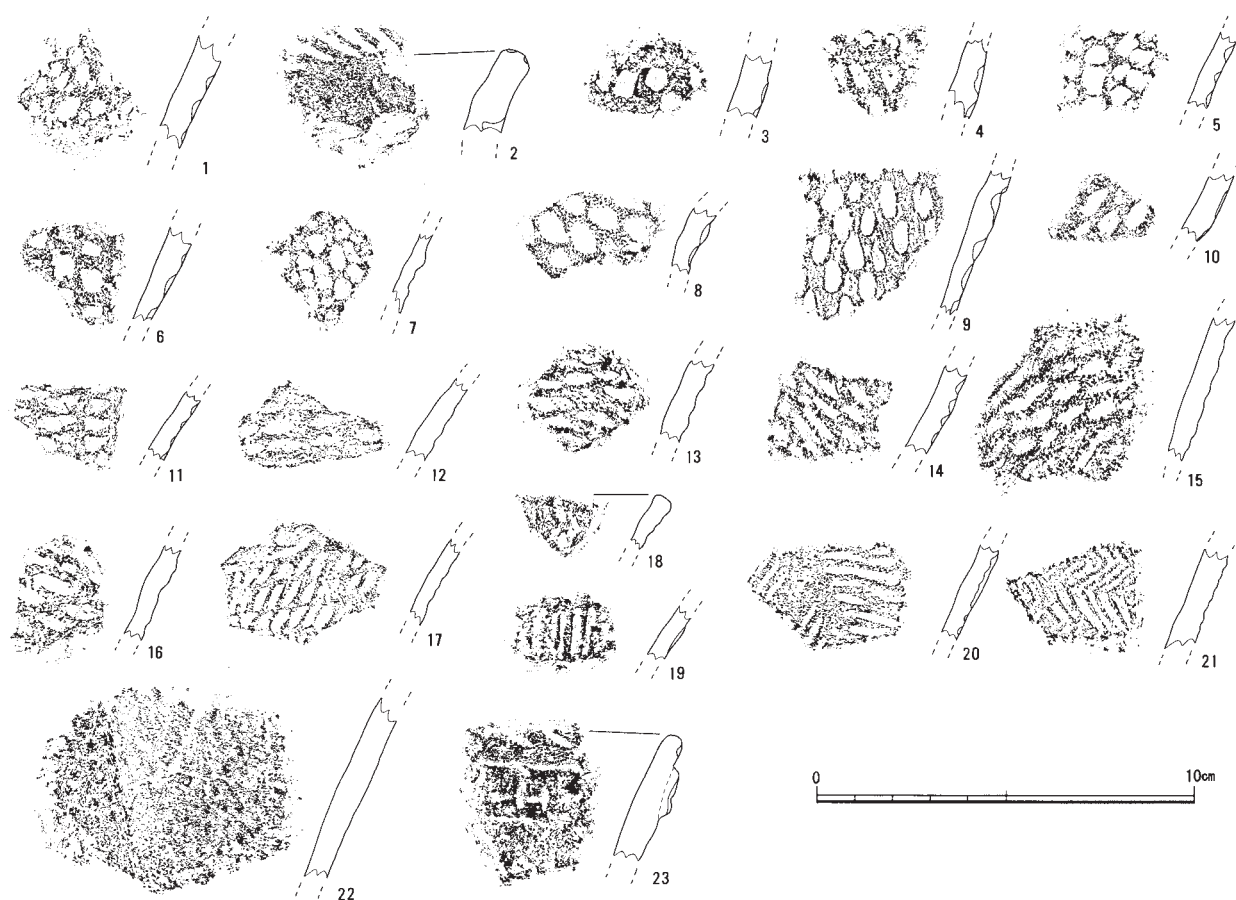
3 採集遺物について

図化した遺物数は少ないが、剥片・石片などを含めた採集遺物全体の量はかなりのボリュームがある。縄文土器については押型文主体の早期の破片にほぼ限定されるようで、通観した限りでは、他の時期のものは認められない。ただ、細片が多いので、あるいは見逃がしたものがあるかもしれない。

次に、土器は文様別・型式別、石器は器種別に、図の順番に沿って概要をみていきたい。

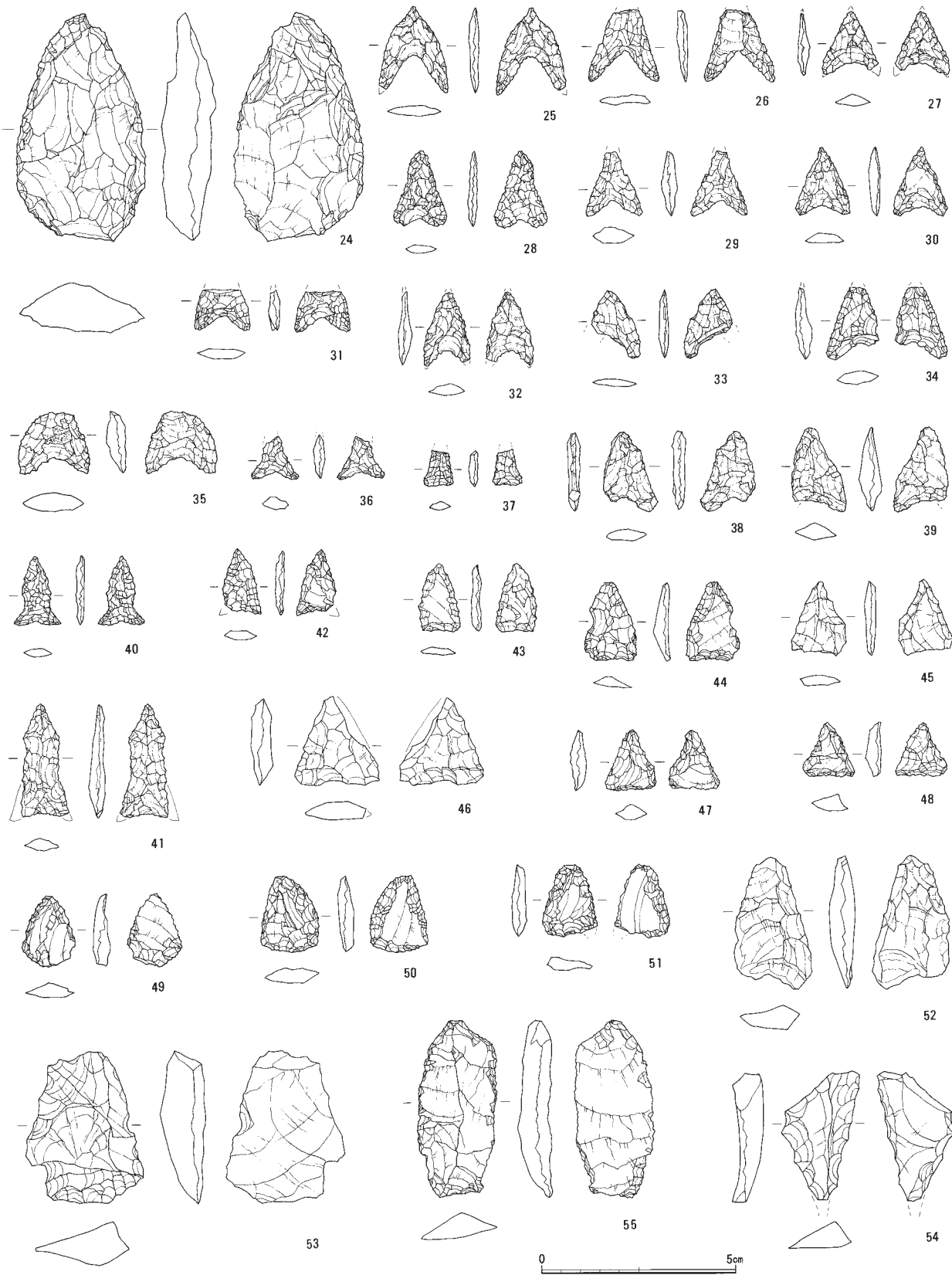
① 早期土器（第2図）

縄文を施したもの（1）一片のみ認められる。節の大きな斜縄文（RL）とその下位に縄圧痕とおもわれる痕跡が残る。今のところ、大鼻式と推定される破片はこれだけである。遺物散布域の北東端部で確認した。



第2図 登り遺跡採集縄文早期土器（1：2）

刺突文を有するもの（２） 数少ない口縁部片で、口端に右下がりの刻目、その下に無文部をおいて、角棒具による刺突文がやや右下がりで施される。口縁部文様帯には回転施文を採用する場合が一般的であるが、本例のように刺突列を充てる一群もあり、大川式古相の一グループを構成する。三重県下では、松阪市鐘突遺跡などに特徴的に



第3図 登り遺跡採集石器（2：3）

みられるタイプである。

市松状の施文があるもの（3～7） 間隔には疎密の違いがある。概して、施文は深い。5・7は文様が一部、重複する。大川式古相に属するものであろう。

ネガティブな楕円文で、概ね格子目状の文様帯となるもの（8～17） 8・9は施文が深い。一部、大川式新相に属する可能性を含むが、ほとんどは神宮寺式に並行する。

山形文を施すもの（18～21） 18は口縁部の小片で、山形文を縦位に施文する。19もその一部と推定される。20は波長の緩やかな山形か、施文が流れたようなもの。21は山が鋭角的で、縦位施文である。神宮寺式か、それに後続するところと推定される。

ポジティブな楕円文を施すもの（22） 楕円文の起伏が乏しく、極めて扁平で、拓影でも辛うじて分かるほどである。やや細粒の楕円文が密接施文されている。いわゆる楕円押型文はこの一片のみである。高山寺式の古相に該当するものであろうか。

口縁下の隆帯に沈線と刻目を施すもの（23） 口端部外斜面に右下がりの刻目、幅1.3cmの扁平な隆帯には横方向の沈線一本を引いた後、それに直交する刻目を加えている。内外両面とも条痕は認められず、繊維も含まない。焼成は比較的良好である。最近、報告された、「宮の平式」（穂谷式など押型文土器終末段階に後続）に類似している。採集した早期土器の中では最も下限に位置し、押型文土器群以外では唯一の資料である。

② 石器（第3図）

木葉形尖頭器（24） 周縁部から階段状剥離が加えられている。基部寄りに最大径があり、裏面はやや平坦化されている。調整は全体的にややラフで、未製品の可能性もある。押型文土器に共伴するか、どうかは不明であり、草創期の可能性もある。

石鏃（25～52） 凹基式と平基式に近いものがほとんどで、明確な凸基式は認められない。細かくみると、長脚鏃に近いもの（25）、側辺が直線的で、二等辺三角形ないし三角形を呈するもの（26・29）、円脚鏃の傾向をもつもの（31～33・35）、大鼻ないし大川式に特有の魚形鏃（40）、長五角形鏃（41～43）、小型三角鏃（47・48）、縁辺調整主体の不定形なもの（49～51）などに分かれる。52は周囲にラフな調整をとどめ、石鏃未製品か、削器のようなものであろう。

搔器（53） 寸づまりの縦長剥片先端部に、わずかに刃部を形成する。

石錐？（54） 先端部を少し欠失する。両側縁に急角度な調整が加えられ、横断面はやや肉厚の三角形となる。

使用痕のある縦長剥片（55） 比較的良好な縦長剥片の両側縁と先端部に微細な使用痕が残る。

以上の石器の石材は24・28・31・34・36・37・40・42・44・46～51・53～55がチャート、あとはすべてサヌカイト製である。石鏃でみると、両者の比率はほぼ半々である。

4 若干のまとめ

前述したように、一之瀬川流域には今のところ本遺跡以外にまとまった資料を有する縄文遺跡は分かっていない。しかし、当期における内陸山間部への活発な進出傾向から推測すると、現在は広く空白ないし希薄な地域となっても、本遺跡がかつてそうであったように、未知の遺跡が存在する可能性は大きく、特に水系づたいの良好な平坦地や緩斜面は頻繁な遊動ルートの候補地として、常にマークしておく必要がある。

本遺跡では押型文土器の確認地点をその都度、細かくチェックしてきた。それと踏査時に受けた感触を総合すると、早期遺物の散布範囲は、実に東西約180m・南北約100mの広範囲におよび、この規模は県下の当期遺跡を眺めても他に類例がなく、特筆に値する。おそらく、当地域の早期・押型文土器期における拠点的・中核的な遺跡に相当

することは間違いないであろう。

押型文土器の型式別散布傾向では大鼻式はやや限定されるようで、大川式で一定の広がりを示し、神宮寺式段階では最も拡張する様相であった。特に、散布密度の高かったのは中央部から東端部にかけての東半分で、このあたりでは焼石礫の散布も目についた。今後、開発の際には十分な注意が要求される。

最後に本稿を草するにあたり、成瀬匡章・西村美幸・楠純子・北川ゆき・谷川知子・宇河由起子氏のご協力を得た。記して感謝の意を表します。

【参考文献】

- 奥義次ほか 1981 『鐘突遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会
山田猛 1988 「押型文土器群の型式学的再検討—三重県下の前半期を中心として—」『三重県史研究』第4号 三重県
奥義次 1993 「三重県における押型文土器出土遺跡の分布動向」『研究紀要』第2号三重県埋蔵文化財センター
皇學館大学考古学研究会 1996 『一之瀬川流域の遺跡』
西村美幸 1997 「登り遺跡」『平成8年度県営農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター
橋本裕行ほか 2004 『宮の平遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所



登り遺跡遠景（西から）